

2007年の世界の不登校研究の概観  
— PSYCHOLOGICAL ABSTRACTS の文献から —

佐藤正道

要約

日本の不登校の問題を考えるうえで、常に世界の研究に目を向け続けることは必要である。筆者は1980年から1990年までの研究の概観を行い、その継続研究として1991年から毎年、ERIC および PSYCHOLOGICAL ABSTRACTS の不登校との関連が考えられるキーワード school attendance, school dropouts, school phobia, school refusal を持つ文献を分類してきている。その継続研究として2007年の文献85件について取り上げ分類し検討を加えた。

**Key words :** school attendance, school dropouts, school phobia, school refusal

I はじめに

筆者(1992a)は、諸外国と日本における不登校の初期研究を踏まえた上で、ERIC および PSYCHOLOGICAL ABSTRACTS の school attendance, school dropouts, school phobia, school refusal をキーワードとする1980年から1990年の400件あまりの文献を中心に各国別、年代順別に分類し、不登校研究の概観を行った。不登校の問題を考える上で、日本国内ばかりではなく世界の研究に常に目を向け続け、1年毎の形式で蓄積していくことは意味があると考え、1991年からそれぞれの年の文献について継続研究を行ってきた。(1992b,1993,1994,1995,1996,1997,1998,1999,2000,2001,2002,2003,2004,2005,2006,2007)。

本研究は、2007年の文献についての継続研究である。今回の研究では、これまでの研究と同様、ERIC データベースと DIALOG データベースの PSYCHOLOGICAL ABSTRACTS (PsycINFO データベース)を用い、文献検索を行おうとした。しかし、ERIC データベースは2003年の文献以降、データベースの検索形態を変更したため、2003年以降の文献については、年毎の検索ができなくなった。2007年の文献についても検索方法が変更のままで、同様の形態の検索ができない状態である。したがって2007年の文献については、PSYCHOLOGICAL ABSTRACTS のみとなる。検索方法は、インターネット経由での作業を行った。これらの中から不登校との関連が考えられるものについて、キーワード毎に分類した。筆者の作業(1992a)に続くこの継続研究は、今回で17年目に当たるが、同一規準で17年分の作業をし、世界での傾向を把握する基礎研究の2007年分である。なお、PSYCHOLOGICAL ABSTRACTS での検索形態が変更になった段階でこの基礎研究は終了することとする。

なお、ERIC データベースについては、キーワードでの検索については、佐藤の行っている経年変化という形態での活用はできないが、費用が発生しないこともあり、現在も更新され続けている、活用のできるデータベースである。

DIALOG データベースでの PSYCHOLOGICAL ABSTRACTS では、school attendance に関する文献が 462 件、school dropouts に関する文献が 273 件、school phobia に関する文献が 329 件、school refusal に関する文献は 161 件であった。

PSYCHOLOGICAL ABSTRACTS データベース 1,225 件の文献の中で不登校との関連が考えられる 85 件について、キーワード毎に分類し、研究の概観をする。

## II 各キーワード毎の研究の概観

ここで取り上げる研究は、2008 年 6 月現在、PSYCHOLOGICAL ABSTRACTS (PsycINFO データベース)において検索し、不登校との関連が考えられる 2007 年分として収録されている文献である。ここでは、日本の高等学校に対応する学年までの不登校との関連が考えられる文献を取り扱っている。

### 1 school attendance に関する研究の概観

2007 年の school attendance をキーワードに持つ文献は 462 件が見いだされる。これらのうち、ここでは 14 件を概観する。国別では、アメリカ合衆国が 11 件、フィンランドが 1 件、カナダが 1 件、英国が 1 件である。

Feldman ら(2007)は、大人と子どもの情緒障害と行動障害をこれまで治療処置してきているストレスマネジメント技術に関する文献を概観している。Chambless と Hollon (1998)によって前もって設定された指針に従って、経験的に支持された療法に対する基準を満たすかどうかを決定するためにそれぞれの治療処置を評価している。この概観では、有効性を確立するために、有効かつ具体的、有効、おそらく有効という有効性を確立するために更なる研究が必要というカテゴリーを用いている。

Kiuru ら(2007)は、青年男女の仲間集団のメンバーがどの程度同様の教育的期待を共有するか、全体及び学校に関係する適応がどの程度これらの期待に関連するかを調査研究している。中等教育への移行に直面している 394 人の 9 年生が、短期間及び長期間の教育的期待、学校での成績、学習困難、学校に対する否定的な態度、問題行動、自尊心を測定する質問紙に答えた。多面的モデルから、仲間集団のメンバーが類似した教育的な期待を共有していることが示された。女子の間では、仲間集団に特有の適応は、仲間集団の教育的期待と関係している。対照的に、男子の間では、仲間集団に特有の問題行動だけが、仲間集団の教育的期待と関係していた。

Jenner ら(2007)は、ルイジアナ州の 21 世紀学習センタープログラムの学習の影響の評価についての調査研究を行っている。準実験的なデザインを用いて、国家標準の事前事後テストに関するコアテストとサブジェクトテストとして成績を操作している(基本技術のアイオアテスト)。

先行研究と評価実践に基づいて、政策立案者の関心の結果(標準化したテスト得点)を用い、鍵となる独立変数としてプログラムの参加を用い、従属変数に関する外的影響に対して統制するための有効な方法を用い、ルイジアナ州の危機的状態にある児童の特定の集団についての評価に焦点を当てている。研究結果によれば、21世紀学習センタープログラムは、30日以上の期間、プログラムに出席した参加者に関する肯定的な学習上の影響を示している。更に、特定の被授与者プログラム、特定の対象者、生徒の下位群にわたって影響が与えられた。出席の状況が学習の影響に肯定的に関連していることが分かった。

Munozら(2007)は、中間評定モデルに対する知識の異なった方法(DWoK)の3年間参加のケンタッキー州の都会の学区での生徒の成績と登校状況についての効果を評価することを目的に研究を行っている。結果によれば、CTBS(基本的技術の理解テスト)とケンタッキー州コアコンテストテストとの両方についての成績が、一致した統制群の学校と比較してDWoKでかなり優れている。生徒の登校状況に関する肯定的な影響は3年間には起こっていない。研究の意味は、コアカリキュラムを伴う科目を統合する学習者中心の包括的学校改革(CSR)モデルが標準テストと基準リファレンステストの両方において、測定可能な到達利得を生み出すことが分かった。

Torres(2007)は、今日そして明日の生徒について知るべきことを決定するために、生徒の人口統計学がどのように変化してきているかを理解し、これらの変化がどのように生徒の出入りと持続に影響を与えるかを考え、大学での成功に危機的状態にある生徒に焦点を当てることから始めている。学校管理者がなすべきことを知るができるように、最良の実践の要約でしめくくっている。あらゆる組織が、高等教育の変化する局面を理解するにはどのような魔法のレシピもないが、生徒が成功できる環境を創り出す際に学校管理者と教員たちの責任を理解することは重要である。

MashとHunsley(2007)は、児童青年の障害の発達上のシステム評価(DSA)に対する現在のアプローチを研究している。DSAは発達精神病理学の概念と方法(Cicchetti, 2006)、児童と家族の行動評価(MashとHunsley,2004,MashとTerdal,1997a,OllendickとHersen,1993)、証拠に基づく評価(HunsleyとMash,2007;MashとHunsley,2005b)から進化し、これらのアプローチのそれぞれに関係する基本的な考えや評価の多くを内包し続けている。親子関係や兄弟姉妹関係のような子どもたちの家族、仲間関係や教師の影響、文化的要因のような比較的大きな社会システムを含む評価の内容の重要な役割、子どもの身体的状態、好み、行動、認知の相互作用に関して焦点を当てている。意思決定を知らせるために用いられた評価の観点、経験的に妥当で実行可能な評価方法、多面的な評価戦略、多重的な通報手段を用いている。有効な治療介入のデザインに導く評価情報に関する強調、治療処置の進歩と結果の進行中の評価が評価過程の統合部分として処理される。総合的な目的は、障害のある子どもと家族に対するDSAの現在の原理と実践を強調し、多くの主要な問題について議論することである。

Chen(2007)は、生徒の経歴、学校の構造、学校の文化、学校の障害と生徒の学業成績の概念

を取り入れて、学校安全と生徒の達成モデルを展開し、構造式モデル化の技術を用いて、ニューヨーク市の613校の小学校に当てはめている。モデルは、 $\chi^2$ 乗検定と適合した指標の長所に基づくデータとよく一致している。モデルは、生徒の達成における学校変数の71%を占めている。生徒の経歴は生徒の行動と生徒の学習に関連している。学校の障害は、生徒の成績に否定的な影響を直接与え、間接的に生徒の登校状況によって影響される。戦略の発議は学校環境を改善し、学校の障害を減少し、生徒の成績を改善するために実行されることができたことを示唆するものである。

KahnとAronson(2007)によると、発達途上にある青年男女についての心的外傷の影響は、継続すべき将来の成長に対して治療的介入にとりわけ非常に重要な意味を持っている。心的外傷を与えられた青年男女による集団療法の原則と同様に青年期の発展に関する心的外傷の影響を論じている。集団療法家の独特の役割を、焦点化している。

Sheppard(2007)によると、英国政府は学校と地方自治体が学業成績と反社会的行動との関係のために、登校を促進することを奨励している。法律では、登校を親の責任としている。親子の相互作用が登校の困難さの進行にどのように影響をしたかについて調査するために、欠席に対する親子の相互作用に関するデータを収集している。12～13歳の登校が良好な生徒と不十分な生徒が、欠席の自己報告、認知した親の反応、自己報告した全日及び授業の怠学、怠学に対する予想される親の反応の定量的な尺度に関して比較された。比較的多く欠席し、親が欠席の要求に対する応答で一貫しない不十分な登校状況の子どもの中では、欠席の要求はかなり頻繁であった。親と若者と共に効果的に働き、大幅に低い登校状況を引き上げるならば、教育社会福祉及び福祉サービスの職員と学校監督の職員には、経験的な調査研究によって裏打ちされた明確な方法を必要としている。

Dorr(2007)は、ニューヨーク市での停学プログラムにおけるアートセラピーグループに焦点を当てている。自然に停学処分にされるようになる青年男女には、未解決の対立、怒りの感情と低い自尊心をもたらす。アートセラピーの過程の2つの構成要素、共同のグループ過程と創造的な芸術創造過程によって例示されるように、これらの問題に対処する際に、アートセラピーグループの有効性を記述している。生徒が互いに協力して、芸術を創造することを学び、対立を解決し、健康的な方向で彼らの怒りに対処することができるようになり、その一方で、彼らの自尊心を構築することになる。学校を離れている生徒は、通常よりよく普通の学校組織において機能する能力がある。芸術創造グループが短期ではあるが、この構造の前向きな面は生徒がその終了を健康的な方向に感じるようになるということである。よりよく損失に対処させ、未解決のまま終わるというこれまでの経験を調整させる。多くの生徒には、第一に出場停止にさせた対立を解決するか、前の学校で友人と先生にさよならも言う機会がなかった時から、このことは適合するものである。

Townsendら(2007)は、1990年から2006年に刊行された文献を概観し、タバコ、アルコール、大麻、マリファナ等の違法な薬物と中途退学との関係を考察している。46件の文献が検討さ

れた。概観から、高等学校中途退学と物質乱用の関係を十分に説明するのには限られた能力と同様に、用いられる理論的な枠組みの異質性を記述している。研究にまたがる中途退学の定義と物質乱用の多様な尺度での差異にもかかわらず、主な研究結果は、高等学校中途退学と物質乱用の関係のかなりの一致を指摘している。社会的に恵まれず貧しい人々、中途退学者、物質乱用をしている人は、縦断的研究での追跡調査での損失のある部分に重なるものである。縦断的研究では参加者を維持するための一層厳密なメカニズムが用いられなければならない。

DeRosier と Gilliom (2007) は、社会的情緒的問題を体験している学齢児の親に対するソーシャルスキルトレーニングプログラムの有効性をテストしている。42 人の参加家族が任意の親のソーシャルスキルトレーニング、親と平行した子のソーシャルスキルトレーニング、治療処置を行わない統制群の 3 つの条件の一つに割り当てられた。二つの治療処置群では、結果尺度での差異は見られなかった。治療処置は、親子のソーシャルスキルの知識、親の社会問題解決、子の情緒的機能での改善に関連していた。変化のメカニズムを調査する追跡調査分析では、親の参加と子のソーシャルスキルの知識での変化が、治療処置への反応を予測することとなった。全体として、研究結果は、子どもの社会的情緒的な問題の治療処置での主な参加者として関わった親の有用性に焦点を当て、そのような治療介入の影響を最大にする方法を暗示するものである。

Leach ら (2007) によると、学業成績の格差はアフリカ系アメリカ人の家族に様々な形で影響を与えている。アフリカ系アメリカ人の子どもがどのように学校を体験しているか、高等学校中途退学、高等学校卒業率、大学の登校状況、大学での達成率に対しての影響を検討している。親に対しては、学業成績の格差は教育的な達成を通して、子どもたちへの直接的な影響を含む、自身の社会経済地位に影響するかもしれない。ここでは、学校への入学から大学の卒業まで、アフリカ系アメリカ人の家族に対する学業成績の格差についての広範囲の概観を行っている。社会的不平等の規定の下、目下の傾向と理論的展望を検討することによって、研究を進めている。

Geier ら (2007) は、初等学校の児童の相対的体重と登校状況の間関係を決定している。フィラデルフィア市内の 9 つの小学校からの合計 1069 人の 4 年から 6 年生が、肥満に対する防止戦略を評価する進行中の無作為抽出試験の一部に該当した。自由で減少した食事の資格がある生徒の平均率は、82.9 $\pm$ 11.5%であった。体重は、学年の後期に計られた。全ての学年の間の欠席者のデータは、学級担任によって記録された。参加者は、医学研究所によって解説される相対的体重、体重不足、通常、太り気味、太りすぎに格付けされた。分散分析から、肥満児が通常の体重の子どもたちよりかなり欠席していることが示された (12.2  $\pm$  11.7 日対 10.1  $\pm$  10.5 日) ( $p < 0.05$ )。線形回帰分析から、肥満の範疇は、年齢、人種、民族、性別に対して調整された後でさえ、欠席日数の有意な一因であることが示された。これらのデータから、太りすぎについての医学的社会的結果に加えて、比較的体重の重い子どもたちには、標準的な体重の仲間よりも、長期欠席に対する大きな危機があることが示唆された。小児期肥満率が

増加するにつれて、長期欠席の平行した増加が予想される。

## 2 school dropoutsに関する研究の概観

2007年の school dropouts をキーワードに持つ文献 273 件のうち、関連の考えられる 12 件について概観する。国別では、これらのうち、アメリカ合衆国が 9 件、イスラエルが 1 件、英国が 1 件、オーストラリアが 1 件である。

Carpentier ら (2007) は、メキシコ系の家族と関わる学校を基盤とする家族に焦点を当てた予防介入の試みにおける文化的に敏感なアプローチを記述している。アプローチはそれぞれの段階での関わりについての予測因子を調査すると同様に、学習への登録と介入プログラムの参加を評価することを通して行った。伝統的な文化的な価値に関わりのすべての面に取り込むことは、文化的な感度を強調していない少数民族に焦点化された試みについて、報告された率よりも高い参加率となった。比較的文化的な変容をしない家族がより高い割合で参加し、英語かスペイン語かという家族の好ましい言語または社会的地位はすべての段階での関わりを予測した。比較的文化的な変容をしない青年男女と一緒にいるスペイン語の家族は、比較的文化的変容をする青年男女と一緒にいるスペイン語の家族より高い割合で参加した。その他の調査結果から、家族の言語と対象とする子どもの家族主義価値の間の二方向の相互作用、家族の片親と両親のいる状態と主要な親のが介入への参加を予測して導入した時間数を含んだ。調査するとき、研究も社会的状態を考慮することの重要性を強調している。

Chafouleas ら (2007) は、学校開業医が生徒の行動上の問題にレッテルを貼らせず、効果的解決を開発する先生と生徒との連携に評価を行う方法を示している。所定の状況で、適切な尺度を選択し、結果を解釈し組織する上で必要な行動データのタイプを決定する枠組みを提供している。事例はすべて結びついており、様々な評価戦略がどのように積極的な行動をサポートし、個人、学級、学校全体のレベルの進歩をモニターするのに用いられるかについて示している。

Mixon (2007) は、資本主義社会での教育制度が社会階級の生産と再生産において有する役割の調査に当てはまる重要な理論と民族誌学の理解をする上でしっかりとした基礎を提供しようとしている。重要な理論と調査研究の理解を展開することは、等しい教育の機会を生徒に提供するために教育制度をどのように改善することができるかに関する関連する洞察を提供することができるので、教師と教師の指導者にとっては重要である。アメリカ合衆国の公教育制度の構造は、すべての生徒のための公明正大でバランスのよいカリキュラムを目標としている。この中心に、社会的な再生産があり、重要な問題となっている。社会的な再生産は、下層階級の生徒が等しい教育機会を与えられていないという公立学校組織の本来の現象である。重要な理論と民族誌学の意味を我々の社会で取り残された生徒の状況を改善することを目的とするどのような発案にでも取り込むことは、不可欠である。

Marachi ら (2007) によると、校内暴力の調査研究の文献の多くは、学校環境で暴力と犠牲に

影響を与えるかも知れない関係要因の慎重な調査なしに問題のある若者の個々の特徴に、狭い範囲で焦点化している。イスラエルの164校の中学校と高等学校の10,254人の国家を代表する対象者において、学校での意思決定における生徒の参加、教師のサポート、生徒の犠牲の関係を生徒と教職員によって調査した。中学校、高等学校の男女のユダヤ人とアラブ人の生徒の中で、全集団分析と集団の形態比較に対する構造式モデルを用いて、データが分析された。すべてのモデルで、先生のサポートの比較的高い水準が、犠牲についての比較的低い割合と関係していた。意思決定への参加は、生徒の性別と民族性による様々な形態に従って、犠牲にも関連した。これらの性別と文化に寄与する理論的社会文化的要因が論じられた。一般的な研究結果は、教師のサポートにおける調査研究の文献と一致したが、参加と学校の関連を考察するときには、文化と性別の効果についての将来の調査研究の問題を引き起こすことになる。

Townsendら(2007)は、school dropoutsにも関連するが、school attendanceにおいて取り上げることとする。

Caldwellら(2007)によると、子育て実践は、少年犯罪の事件に対して大きな影響を与える。行動上に問題のある子どもの親によって体験されるストレスは、子育て実践の主要な要因である。若者の犯罪者の間での常習的犯行を減少させるために展開した家族解決プログラムという確立された多面的な家族治療介入への参加によって親のストレスが減少する程度を調査研究している。性別、民族性、中途退学率、3ヶ月の追跡調査での治療介入の利得、片親と両方での親の世帯、家族機能の次元と親と青年男女のコミュニケーションにわたる親のストレスについても調査研究を行った。親たちは、治療介入より以前の臨床対象ではない親よりも大きな親のストレスレベルを報告していた。親のストレスは治療介入に応じて減少したが、治療介入への追跡調査までではなかった。治療介入の完了者と完了者ではない者の間あるいは親のストレスと親の性別や民族性との間には差異は見られなかった。片親の世帯は、親のストレスのかなり高いレベルと関連が見られた。家族機能は、親のストレスと否定的な相関であった。若い初犯者と親の間の開かれたコミュニケーションは治療介入後と追跡調査の双方で、治療介入に従ってかなり改善された。

Balfanzら(2007)は、都市部にある中等学校が生徒の離脱と戦い、卒業率を高めるために、早期に識別と介入の実践的、概念的、経験的基盤を考察している。都市にある学校の多くの生徒は、中等学校の初めに離脱し、結局卒業率を大いに減らすことになる。6学年の不十分な登校状況、不品行、落第を反映する4つの予測因子が高等学校を卒業しない生徒の60%を特定するために用いることがどのようにできるかを示すために、1996年から2004年までの約13,000人の生徒の縦断的分析を用いた。登校状況、行動上の余分の介入と、効果的な学校改革とを結びつけることによって、卒業率を増加させることができることが分かった。

SchonbergとShaw(2007)は、子どもの行為上の問題に関する文献が、ある種の行為上の問題のリスク要因が不利益な条件や比較的裕福な環境にわたっての重要性によって変化するという考えを支持するかどうかを調べようと、文献の概観を行っている。不利益な条件に置かれた環

境は、社会経済的リスクと近隣のリスクによって代表される。3つのタイプの研究、貧困な家庭や不利益な地域社会の若者や比較的裕福な関係の若者に対する行為上の問題に関する遺伝的環境的影響の重要性を比較する行動の遺伝的研究、社会経済的リスクと近隣のリスクやその他のリスク要因がどのように相互作用するかを調査する研究、社会経済的リスクと近隣のリスクの段階にわたる行為上の問題に対する先行研究を比較する研究が概観された。研究結果は、個々の子どものリスク要因が不利益な条件や近隣のリスクと相互作用する方法については一致していない。家族のリスク要因は、一般に貧困な家族や不利益な地域社会の若者に対して、特に親の監督にとっては、比較的大きな重要性があることが分かった。大部分の研究は、身体的な規律に焦点を当てたか、あるいは不利益な、極度に貧困な環境の子どもに限定されたものであった。調査結果から、極度に貧困な環境では、家族の影響が常軌を逸した仲間のようなその他の行為上の問題のリスク要因の広がりによって圧倒されていることが示唆されている。

Koball(2007)によると、1996年の福祉改革法は、18才未満の親が彼らの親または成人の親類と一緒に暮らし、福祉給付金の資格がある学校に入学することを義務づけている。未成年の母が学校を中退しないように、福祉改革後に親と一緒に暮らしそうになったかどうかを調査研究している。1988年の国家教育縦断調査及び1997年の若者の国家縦断調査のデータが、差分の差分法において用いられた。研究結果から、福祉改革後、親と一緒に未成年の母の共同住居は増加し、中途退学率は減少した。結論として、福祉改革の必要条件は、未成年の母の生活の準備と中途退学率の変化とに関係する。

Marks(2007)によると、学校自体が生徒が学校を卒業しないことについて、重要な役割を果たすとしばしば考えられている。学校の特性が学校を離脱することに影響を与えるということについては文献では一致せず、特定された学校の効果は、適切な個々の段階の影響の欠落や不十分な測定により見せかけかも知れない。学校離脱についての学校の重要性が、社会経済的背景のより包括的な尺度と、以前よりも利用可能な生徒の成績を含むPISAの研究に対するOECDの2003年のプログラムに基づく縦断的データを用いてオーストラリアの文献において調査研究を行った。学校離脱に関する最も強い影響は、PISAのテストでの生徒の達成であった。学校を離れた人々の中で、学校間はかなり大きな違いがあったが、わずかな割合の学校だけが、個々のレベルでの影響が考慮された時の学校離脱のかなり大きなあるいは低い水準を示した。

Christleら(2007)によると、高等学校を中途退学することは、学校からの離脱の長期の過程を完了させ、生徒、家族、地域社会に対する深刻な社会的経済的結果をもたらす。高等学校を中途退学する生徒は、失業中であることが多く、卒業する人々よりも給与が少なく、公的扶助にあり、刑務所に入る可能性が高い。ケンタッキー州の196校の高等学校での中途退学率を調査研究している。定性的定量的手続きを用い、ピアソン積率相関係数を計算し、中途退学率と強い相関を示す学校段階の変数を特定した。最も高い中途退学率の20校の事例が、多変量分散分析を用いて、最も低い中途退学率の20校の事例を比較した。各群4校の学校が事例とし

て選定された。管理者調査，職員面接，現場の観察から収集された情報が高い中途退学率と低い中途退学率の学校の特性の詳述を提供した。調査結果から，多くの学校変数が中途退学率と特異的に関連することが示された。

### 3 school phobiaに関する研究の概観

2007年のschool phobiaをキーワードに持つ文献329件のうち，関連の考えられる34件を取り上げる。国別では，アメリカ合衆国が24件，英国が3件，ノルウェーが1件，オーストラリアが3件，オランダが1件，カナダが1件，ドイツが1件である。

Chorpita(2007)は，立証されたエックスポージャーを基盤とする技術を用いて，あらゆる形態の児童期の不安を治療処置する体系的アプローチを表している。この厳密にテストされたモジュールの処理を柔軟性と個別化で明らかに念頭において，優れたものになるように設計されている。実際の世界や非常に多様な地域精神衛生の関係で展開すると，動機づけの問題，破壊的行動，家庭の問題，およびその他の頻繁に遭遇する臨床上の障害を対象とするように，絶えず治療処置を調整することができる。

Kearney(2007)によると，児童青年の精神障害の最も一般的で弱体化させる組み合わせの一つは不安障害である。若者の一般的な不安と不安に関連する障害には，分離不安障害，全般性不安障害，社会不安障害，特定の恐怖症，登校拒否行動，選択性緘黙，複雑な不安抑うつ兆候である。若者のあまり一般的でない不安障害には，パニック障害，強迫神経症，心的外傷性ストレス障害が含まれる。不安障害の若者の評価に関する文献は，近年急速に発展したので，確立された信頼性と正当性を伴う技術を臨床医が利用することを促すものである。さらに，臨床医が不安，回避，認知，およびその他の時々微妙な構造物における極く小さな相違すら検出するのに十分に敏感で，治療処置過程を図示させる査定方法を臨床医に促している。これらの人々に最も一般的な技術，面接を網羅することによって，様々な査定方法の議論を始める。次に，児童の自己報告の尺度が論じられ，親と教師の評価がなされている。行動の観察と自己モニターが次に提示される。他の話題には，認知的査定，記録，ドキュメンテーション，生理的評価が含まれる。

ReddyとDe Thomas(2007)は，ADHDの児童青年に対する評価実践の概観を行っている。ADHDとADHDに関連する障害の重複と鑑別診断を表している。これらの人々に用いられる主要な認知的・神経心理学的，社会的・情緒的評価アプローチの幾つかの記述を提供している。最終的に，ADHDの児童のこれらの尺度の適応を説明するためにケース研究が記述されている。

Moffittら(2007)によると，全般性不安障害と大うつ病性障害との密接な関係が将来の診断システムでどのように特徴づけられるかに関する質問を促している。大うつ病性障害と全般性不安障害に関するリスク因子が同様であるか，異なっているかにかかわらず，テストを行っている。方法としては，1972～73年のダニーデンの出生群の男女を代表する1,037人が96%の登録で32歳まで追跡調査を行った。成人の全般性不安障害と大うつ病性障害が18歳，21歳，

26歳、32歳の年齢のときに診断され、少年少女の不安・抑うつ状態についても考慮された。13の将来のリスク尺度が家系、不利な家族環境、児童期の行動、青年期の自尊心、人格特性の領域に索引をつけた。大うつ病性障害と全般性不安障害の重複障害は、すべての領域にわたって非常に高いリスク因子が予想された。大うつ病性障害と全般性不安障害は最も早い発症、ほとんどが再発すること、メンタル・ヘルスサービスと薬物療法の最も多い活用により特徴づけられる。純粋な全般性不安障害には、大うつ病性障害と全般性不安障害の重複障害に対する高い段階と同様のリスク因子の段階である。純粋な全般性不安障害には大うつ病性障害と全般性不安障害の重複障害に対する高められた段階に対するのと同様のリスク因子があるが、一般には、純粋な大うつ病性障害ではなかった。低い自己評価尺度やいくらか多い酷使のような不利な家族環境と内在化した問題、行動上の問題、幾分抑制的な気質のような児童期の行動の領域において、純粋な全般性不安障害には、純粋な大うつ病性障害には占められない児童期の間のリスクがあった。純粋な大うつ病性障害には、抑うつ状態の家族歴や低い積極的な情動性の人格の領域では純粋な全般性不安障害によって占められるリスクはなかった。結論として、純粋な大人の大うつ病性障害対全般性不安障害に対する特定の先行するリスク要因は、部分的に異なった因果関係学の道筋を示すかも知れない。全般性不安障害と、大うつ病性障害と全般性不安障害の重複障害は、全般性不安障害の存在が相対的に比較的重篤な内在化する障害に向かう道筋を示すかも知れないということを示唆する多くのリスク指標を占める。

Frostad と Pijl (2007) は、特別な必要性のある生徒がインクルーシブ教育において、仲間と関係を築くことに苦勞しているとしている。仲間と積極的な関係を展開するための重要な条件は、年相応の適切な社会的技能を有することである。社会的技能が不十分な生徒は、除外されるべき比較的大きな危機に直面することがありそうに思われる。ここでは、特別な必要性のある生徒の社会的技術を記述し、これらの生徒のインクルーシブ教育の学級での社会的位置とを関連させている。4年生と7年生から、合計989人の生徒がデータ収集に参加している。分析は、結合力のある下位群の仲間の受容、友情、会員資格という3つの異なった社会的包含の指標に基づいている。結果は、特別な必要性のある生徒の20%から25%が、彼らの仲間集団に社会的には含まれていないことが示されている。一般には、社会的位置と社会的技能は低い相関性を示しているが、行動上の問題のある生徒には当てはまらない。彼らの社会的位置は、強く彼らの社会的技能に関連している。この特定の集団に対して、ソーシャルスキルトレーニングは、彼らの仲間との接触、関係、および友情を維持する際に彼らをサポートすることができる。

Joormann ら (2007) は、抑うつ状態にある母親の子どもが自分自身でうつ病性障害を進行させる高いリスクがあると述べてきているとしている。しかしながら、現在、どのような要因が高いリスクにこれらの子どもを置くかについてはほとんど理解されていない。娘の人生の間に、母親が抑うつ状態の再発症となるエピソードを経験している障害のない娘が、感情的情報の偏っている処理によって特徴づけられるかどうかを調査した。否定的な気分の誘導に続いて、参加者は感情面のドットプロブ課題を行った。一度も障害を発症していない母親の統制群の娘

ではなく、抑うつ状態に対する高いリスクのある娘が選択的に否定的表情に関わりがある。対照的に、統制群の娘だけが選択的に積極的な表情に関わった。これらの結果は抑うつ状態の認知的に脆弱的なモデルの支持を提供している。

Monroeら(2007)によると、主要な生活上の出来事が、引き続く再発症より一般に1回目の生涯のうつ病発症の始まりに先行していることが分かった。この研究結果に対する一般的に経験的な支持にもかかわらず、直接、主要な生活上の出来事の役割がどのように連続した再発症を変化させるかも知れないということについては、ほとんどデータは述べていない。さらに、抑うつ状態の再発症に対する1回目の生涯のエピソードに関する主要な慢性的な困難をほとんどの研究では調査していない。この研究では、大うつ病と診断された96人の対象者によって、抑うつ性エピソードの生涯の履歴に関して、主要な生活上の出来事と主要な困難との間の関係を検定している。人生のストレスの調査者に基づく尺度を用いて、主要な生活上の出来事がより少ない生涯のエピソードと関係をしていたのかに対しては、主要な慢性的な困難がより先のエピソードに関連があることが分かった。これらの調査結果は、抑うつ状態の連続した再発症について大きな人生上のストレスの変化する役割を説明するかもしれない背景となるメカニズムに関して議論している。

Farrellら(2007)は、児童青年の不安障害に対する学校を基盤とする治療介入を調査研究している。不安障害は、児童期及び青年期に起こるもっとも一般的な精神健康上の問題の一つであり、若者の1/6に影響を与えるものである。およそ30人の生徒の標準的な学級の中で、児童期あるいは青年期のある段階で、臨床的な不安障害を進行させる危機にある子どもは潜在的に4人ないし6人いることになる。児童期においては、不安の体験は、単純であったり直接的なものではない。臨床的に重要な不安を体験した若者の大部分は、実際に1つ以上の不安障害を体験し、不安に陥っている児童青年の65%から95%が、重複する不安障害を体験することになる。児童期の不安障害は、また、抑うつ状態としばしば同時に起こっており、ある研究では、不安を抱えている若者の22%から44%で重複する抑うつ状態を起こしていることが示されている。児童期の不安と抑うつ状態の現実的な関係が示されており、不安障害はしばしば青年期と成人期のその後の抑うつ状態の進行に先行し、その進行を予測するものである。学校環境が、治療介入に基づく調査研究と実践を加える明確に賞賛される関係を提供することになる。地域社会での治療処置では、必要な児童すべてを特定して対象とすることができず、援助を必要とする児童や家族でさえ要求を満たしていない。児童と青年での情緒的な混乱の広がりを減少させることができない地域医療システムに代わって、学校を精神健康の促進と予防に利用する選択肢を提供することになる。

Kearneyら(2007c)によると、登校拒否行動は精神健康の専門家がしばしば実際に目にする一般的で非常に苛立たしい問題である。このセラピストガイドでは、児童における登校拒否行動を評価し、治療処置するための規範的モデルの概略を提供するように設計されている。第2章では、これらの人々に対する治療処置を指定する方法の段階的な提示だけではなく推薦された

評価手順を記載している。第3章では、評価結果をまとめ、家族に対する治療処置勧告をするための提案を含むコンサルテーションセッションの面を記載している。第4章から7章では、登校拒否行動の4つのグループの各々の規範的な治療処置計画を記載している。第5章は、嫌悪する社会的状態あるいは状況を評価することを逃れるために学校を拒否する子どもたちの規範的な治療処置手順を論じている。第6章では、注意のために学校を拒否する子どもたちの規範的な治療処置手順を論じている。第7章では、具体的な強化を続行するために学校を拒否する子どもたちの規範的な治療処置手順を論じている。最後に、第8章では規範的な治療処置の全てに関連するスリップと再発防止に関連した問題を論じている。

Franklin と Martin(2007)によると、エクスポージャーと儀式防止を含む認知行動療法は、成人の強迫性障害に対して確立した治療処置である。その有効性に対する支持が多くのタイプ1及びタイプ2の研究から導かれており、強迫性障害に対するより認知に基づいた治療処置に関する最近の文献では、このアプローチに対して更に経験的な支持をエクスポージャーと儀式防止を必要としている認知行動療法は、成人の強迫性障害に対する確立した治療処置である。その有効性に対する支持は多くのタイプ1の研究とタイプ2の研究に由来する。セロトニン再摂取抑制剤またはクロミプラミンを加味したエクスポージャーと儀式防止を研究する結合された治療処置研究は、単独の治療に若干の利点を提供したが、曖昧な調査結果が同様に出てきている。近年、認知行動療法を用いる小児強迫性障害の治療処置に払われる注意が増加してきており、現在、強迫性障害の若者に対するこのようなアプローチの有効性を文書化しているいくつかのタイプ1の研究がある。様々な臨床条件における強迫性障害に対する認知行動療法の有効性と結果の予測因子を調査研究することが必要である。

Grant と Weissman(2007)によると、精神医学的疫学は、性差と精神病理学の研究にかけがえのない出発点と根拠を提供する。疫学は、そのような人々の障害の発生、分布と決定因子の研究である。重要な人々の下位群中の精神医学的障害の広がりにおける変化は、病因についての重要な手掛かりを提供することができる。たとえば、疫学的研究の頻繁な研究結果は、双極性Ⅰ障害と双極性Ⅱ障害を伴う大部分の不安障害と気分障害にある女性では優勢であり、薬物乱用障害と反社会的人格障害での男性で優勢である。1980年から行われている国家縦断的研究と同様にアメリカ合衆国の一般的集団の3つの大きな疫学的調査から現れた精神病理学上の広がりにおける性差を概観している。性差の主要な決定因子についても確認をしている。Weissman と Klerman(1977)によって最初に提案され、詳細に考察された人為現象的(artifactual)、遺伝子的決定因子を別々に考察している。この概観に基づいて、精神医学的障害における性差の知識での格差を特定し、DSM-V 及びそれ以降の疫学的研究課題の発展の段階を確立するものである。

Harrison ら(2007)によると、トゥレット症候群の医学的処置は、同時に起こる症状と同様に、チックの症状の慎重な最初の評価と特定によるものである。トゥレット症候群は、注意欠陥、学習上の問題、不安及び気分上の症状を含む他の困難さがしばしば付随している。多くの場合、

これらの同時に起こっている問題は、チックの症状よりも臨床的に重要性があるかも知れない。同時に起こる問題の存在は、初期の治療処置の選択にとっても重要な意味があるかも知れない。トゥレット症候群の治療処置に対する一般的なアプローチの後に、トゥレット症候群及び関連する状況の様々な医学的治療処置の概観を行っている。他剤無効患者及び臨床的に複雑な患者についても取り上げている。

Weissman ら (2007) は、対人関係療法を学びたい臨床医のための実践的なガイドを著している。まず最初に大うつ病の治療として開発された対人関係療法は、いくつかの他の障害の治療処置として非常に効果的であるとわかった。対人関係療法は薬物療法と併用することができ、抗うつ薬を飲むことができないかもしれない人々に対して薬物療法に安全に代わるものである。対人関係療法は、症状を楽にするだけでなく、同様にソーシャルスキルも構築することが示された。臨床医は双極性障害、不安障害、摂食障害、境界性パーソナリティ障害を含む他の障害と同様に、効果的に抑うつ状態を治療処置するために、対人関係療法を用いる方法を学ぶことになる。治療処置の発案者によって書かれ、どのように患者との臨床上の出会いがなされ、対人関係療法の治療処置にどのように焦点を当て、治療的な困難さを取り扱う方法にアプローチする方法を記載している。対人関係療法に関する研究調査結果を更新し、その適合を異なる文化に提案している。

Meiser-Stedman ら (2007) によると、児童青年の急性ストレス障害 (ASD) と外傷後ストレス障害 (PTSD) に対する親子の合意を調べることは、精神的な外傷にさらされた子どもの評価を知らせることによって不可欠であるが、適切な統計的技術を用いて、この関係を調査している研究はない。これらの障害に対する親子の合意は、暴行と自動車事故の子どもの生存者の将来に関する研究での構造化インタビューによって調査され、2～4週間と6ヶ月の心的外傷後の評価を行った。子どもは、親の報告よりも自身の報告に基づいて、その他の ASD や PTSD 症状の集団と同様に、ASD に対する基準をかなり満たしているように考えられる。ASD に対する親子の合意は不十分であるが (Cohenno  $\kappa$  係数=-0.04)、PTSD に対しては悪くはなかった (Cohenno  $\kappa$  係数=-0.21)。その他の情緒障害に対しては合意は広い範囲であり (Cohenno  $\kappa$  係数=-0.07～0.64)、全般性不安障害においては ASD と PTSD に対して、優れた親子の合意が見出された ( $\phi$  係数によつての評価)。調査結果から、特に早い段階での外傷後のストレスを見分ける上で、児童青年への直接の面接が必要であり、その他の不安障害には、比較的明確な心的外傷の表れが示唆される。

Edgar ら (2007) は、精神病理学を研究するために精神心理学的技術の使用に関連する理論的で実際的な問題のいくらかを考慮することをまず目的として研究を行っている。早期の精神生理学研究を支えているいくつかの理論的な概念に関する議論を提供し、現在精神生理学研究者が立ち向かう若干の哲学的問題、不安、抑うつ状態、統合失調症の3つの障害を調査研究している精神心理学的研究の選択的な概観と実際的な困難のいくつかを取り扱う方法の提案が精神心理学的研究と結びついた。概観は必然的に制限され、主にある種の精神病理学と若干の精神

心理学的尺度を無視することになる。議論される大部分の実際的な問題は、著されている研究に特有なものではない。血行力学的イメージング、電磁気学のソース・イメージング、まばたき、眼球運動、自律反応のような精神心理学的尺度は、個々の機能の多様でユニークな考えを提供する。精神心理学的調査結果は、内分泌で、遺伝子で、他の領域にわたっている従来の生物学的方法を補うことができるだけでなく、自己報告尺度、行動のパフォーマンス、情報提供者データと診断面接を含む従来の精神的方法から、調査結果を補強あるいは否認することができる。明白な反応の成果が望ましくないか利用できない(Coles, 1989)時、精神心理学的調査結果も作業達成に関わる、個人が報告しない精神的過程に、行動を評価する際に関係する精神的過程の時間経過をモニターすることに役立つ。精神病理学研究において、精神心理学的処置がますます内表現型として使われ、研究者は診断サブタイプを定めるためにますます自覚症状よりもむしろ精神心理学的方法の使用を調査研究している。

Friman(2007)は、school phobiaにも関連するが、school refusalにおいて取上げる。

Howlin(2007)は、自閉症スペクトラムの人々の成人期の研究結果の概観を行っている。結果に関連した要因、自閉症とアスペルガー症候群の個人間の結果の違い、成人期の悪化、成人期の精神医学的障害、自閉症と犯罪行為の関連と成人期の結果に対する早めの治療介入の結果に対する効果を取上げている。

Bosacki と Dane(2007)は、抑うつ状態と社会不安のような内在化した問題と仲間の関係を自尊心が調停するかどうか調査研究している。13～18歳の3756人の女子の合計7290人の青年男女は、自尊心、社会不安、抑うつ状態と同様に直接のおよび間接的な犠牲、社会的孤立、疎外と信用の友好配属と対立と支持の友情の質を含む仲間関係の自己報告調査を完了した。回帰分析によれば、自尊心が部分的に社会的孤立、疎外の友好配属と抑うつ状態と社会不安の両方の関係を調停し、一方、信用の友好配属は抑うつ状態だけの部分的に調停を行った。全体として、仲間の関係と抑うつ状態の間のつながりは、仲間の関係と社会不安の間の関係より、自尊心によって、強く調停された。

Bolteら(2007)は、自閉症のより広い表現型として概念化されるかもしれない特徴を徹底的に調査するため、強迫性障害(OCD)、若年発症統合失調症(EOS)、精神遅滞(MR)の対象者の親と同様に単純で複合的な家族からの自閉症にかかった対象者の親が人格形態と障害調査及び症状チェックリスト-90を用いて評価を行った。例えば reserved/schizoid や抑うつ状態のような幾つかの下位尺度で、OCDの対象者の親と比較すると、自閉症の親の得点は、増加している。結果は、自閉症のより広い表現型の特性に対していくらかの支持を提供している。重篤な障害のある子どもを育てる重荷は、この表現型の部分に影響を与える要因として除外することができなかった。

McLaughlinら(2007)によると、大部分の成人の精神医学的障害の広がり、人種的、民族的集団全体にわたって変化しており、防止と治療介入努力への重要な意味がある。青年男女での症状と障害の内在化と外在化の広がり、人種的、民族的差異についての研究は、一貫性があま

りなかったか、一般的に不足していた。アメリカ合衆国の白人、黒人、スペイン語系ラテンアメリカ系の3つの主要な人種的、民族的集団を十分に代表する6年、7年、8年の大きなサンプルの中で、これらの症状群の広がりを見極めようとしている。スペイン語系の女子は、他の集団よりも高い抑うつ状態、不安、確立された攻撃性の段階を体験していると報告していた。黒人の男子は明らかな攻撃的行動の最も高い段階を報告し、更に他の人種的、民族的集団の男子よりも高い生理的不安と障害のある食事についての比較的高い段階を報告していた。スペイン語系の女子も、他の人種的、民族的集団よりも重複障害の高い段階を示していた。

Schonberg と Shaw(2007b)によると、モデル軌道に対する Nagin の準パラメータ的、集団に基づくアプローチの結合軌道分析版（集団に基づく展開モデル。ケンブリッジ、MA：ハーバード大学プレス（2005））が、5～12歳の男子の行為上の問題と近隣の社会経済的状態がどのように共変するかを評価するのに用いられた。これらの子どもが18ヵ月であった時、参加者は女性、幼児と子どもクリニックから補充された。引き続き分析では、自身の家庭は貧しく、裕福な近所のある男子が、児童期の間に行為上の問題の家族の危険因子にさらされた程度と行為上の問題の危険因子が地域社会全体に一般化していた範囲で異なるかどうかを調査研究した。行為上の問題の男子の軌跡と近隣の社会経済的状態の間では、調査結果から、小さいが、肯定的な関係が明らかになった。より裕福な地域社会の慢性的な行為上の問題のある男子は、より貧しい地域社会の対象者より児童個々の行為上の問題の危険因子があることが分かった。

Erath ら(2007)は、自身と仲間の観点、先生の評価と直接的な観察を含む多数の情報提供者を利用する早期青年期間の社会不安と関連した要因を調査した。社会不安と貧弱な仲間の関係による社会不安を関連づけている調停者の相関として、否定的な社会的達成予測、不適応な対処戦略とソーシャルスキルの欠損が調べられた。高い社会不安に対して対象とされた参加者は、84人の中学生、うち47人が女子、37人が男子であった。分析から、社会不安と減少した仲間の受容を関連づける相関関係を明らかにし、仲間を犠牲にすることが増えた。経路分析から、否定的な社会的達成予測と社会的撤回と解放が社会的不安と減少した仲間受容の間の関係を説明することが示された。社会不安、自発的対処戦略と社会的撤回と解放は、男子に対する直接的なさらなる仲間を犠牲にすることとの関連があった。結果から、臨床サンプルに基づく調査結果を繰り返して、中学校において、社会不安と関連した認知的、社会的、行動的な要因の理解を延長して、社会不安の相関物の性差に関して、新情報を提供している。

Michail と Birchwood(2007)によると、情緒的機能障害は、精神病において一般的である。社会不安と抑うつ状態は、精神病の間及び直後の時期でさえ、以前に遭遇した最も一般的な問題の一つである。これらの障害の病因は不明なままであり、発達上及び心理学的な起源を確認する必要性は基本的に重要である。社会不安と抑うつ状態を、社会的階級の展望から考えている。予備調査結果(Michail と Birchwood)に基づいて、精神病についての恥ずべきこと、病気の発見の恐れと病気を他から隠す努力が社会不安を引き起こしている社会的関係を汚染することが示唆される。統合失調症での抑うつ状態が、損失、屈辱とわなを伴う生活上の出来事として病氣

の評価に関連があることが分かる。心理学的な治療介入と精神病と関連する苦悩の情緒障害の治療処置が、議論されている。

Ginsburg と Kingery (2007)によると、不安障害は児童青年の最も一般的な精神医学的状态である。経験的な証拠から若者の大多数が認知行動療法 (CBT) の短期コースの後には、臨床的に意味のある利得を示すことが示唆される。この治療処置の文献の状態に関するこの段階での最新版を示し、臨床医に特定の CBT 戦略の記述を提供する。これらの戦略の実施を例示している事例も含まれる。連続する戦略に対して、しばしば直面する障害と臨床的アルゴリズムを管理する際のヒントが、議論されている。

Williams ら (2007)によると、社会的相互関係の欠損は、自閉症スペクトラム (ASD) の中心的な特徴である。ここでは、ASD の学齢期の児童青年に対するグループに基づくソーシャルスキルトレーニングプログラムでの調査研究の状態を要約した。グループに基づくソーシャルスキル治療介入プログラムを検討する論文と同様に、1985 ~ 2006 年の間のグループソーシャルスキル治療介入のすべての刊行された研究が、概観された。科学の状態を評価するために、NIMH 作業グループによって開発されたテンプレートが、14 件の確認された研究に適用された。この概観に基づくと、このアプローチに対する経験的な支持は不完全であるが、有望な治療介入戦略が確認された。

Chalfant ら (2007)は、重複障害と高機能自閉症 (HFA) の 47 人の児童の不安に対する家族に基づく認知行動療法を評価している。治療処置には、12 週のグループセッションを含み、待機リスト状態と比較された。治療処置の前後の変化が、児童、親、教師の報告尺度と同様に臨床面接を用いて調査された。治療処置の追跡調査では、治療処置を受けている参加者の 71.4%が、不安障害の診断基準をもはや満たさなかった。二つの条件の間の比較から、自己報告、親の報告、教師の報告で測定されたように、不安の症状の重要な縮小が見られた。HFA の子どもの認知行動療法の使用と、治療処置の構成要素に関する心の理論研究および更なる研究に対する意味に焦点を当てている。

#### 4 school refusalに関する文献

2007 年の school refusal をキーワードに持つ文献 161 件のうち、関連の考えられる 11 件を取り上げる。国別では、アメリカ合衆国が 8 件、英国が 3 件である。

Farrell ら (2007) および Kearney (2007c) は school refusal にも関連するが、school phobia で取り上げることとする。

Unger ら (2007)によると、社会化は、スペイン語系ラテンアメリカ系の若者の間では、多数の健康上と社会的結果とに関係していた。様々な自己報告尺度が社会化を測定するのに用いられ、研究結果の比較を難しくしている。ロサンゼルス の 9 年生の 221 人のスペイン語系ラテンアメリカ系の生徒に、いくつかの一般的に用いられている社会化尺度を行った。これらの尺度

の全てが社会化を測定するとしているが、尺度の間の相関関係と言語使用尺度での相関関係は穏やかであった。予想されるように、スペイン語系ラテンアメリカ系方向尺度での比較的高い得点あるいはアメリカ合衆国白人方向尺度での比較的低い得点は民族的なアイデンティティ形成の比較的高いレベルと関係している。結果によると、これらの社会化尺度は、社会化の複雑な現象の異なる側面を測定するかも知れない。例えば、全く言語に基づく方法は、比較的広範な尺度とは相違についてわずかな領域のみ共有している。さらなる研究が、青年の社会化尺度を構築し、認めるためには必要である。

Southam-Gerow と Chorpita(2007)によると、疫学的研究においては 6%から 15%にわたる臨床上の障害の生涯発症率であり、若者の恐怖と不安に関連した問題は比較的一般的である(例えば、Silverman と Ginsburg(1998)、アメリカ公衆衛生局(2000))。不安の問題を抱えた若者は、例えば貧弱な学校での達成、社会上の問題、家族の対立のような重要でしばしば持続する社会心理的障害を体験している(例えば、Langley ら(2004)、Silverman と Ginsburg(1998))。ここでは、児童青年の不安の評価についての文献を調査研究している。児童青年の間で普通にみられる様々な不安障害に関する議論から始めている。評価における内容とプロセスの間の識別と多面的な評価アプローチの重要性を含む評価に関連する概念上の問題を論じている。評価の目的を記述し、一般の評価方法の簡潔な概要を述べている。最後に、いくらかの提案を将来の研究に対して行っている。全体を通じた焦点は、評価の本当の世界の適用性に置いている。臨床研究者が研究に基づく治療介入の普及にとって必須となる要因を理解することに向かうので、多くは臨床の評価に対する類似した方向に進む必要性を促した(例えば、Mash と Hunsley(2005); Silverman と Ollendick(2005))。

Friman(2007)によると、危険は人生のあらゆる部分に潜むものであり、恐怖は遍在する人間の感情である。しかし、人間の恐怖は、本当の危険に限定はされない。恐怖の範囲は、ほとんどすべての人間の体験に及ぶ。人々はセックス、セックスの不足、愛情、愛情の不足、注意、注意の不足、他の人といること、一人でいること、飛ぶこと、飛ぶことを失うこと、乗ること、乗ることを失うこと、歩くこと、歩くことができないこと、出て行くこと、見つかること、食べ過ぎること、食べなさすぎる、枚挙に暇がないほど多くの事例が怖い。人間は、例えば過去、未来、未知、自由、規制のような、より抽象的な現象も怖い。多くの人々はなぜ恐れるかについて、わかってはいない。しかし、慢性的な恐怖を体験はしない。現在では、本当の危険を含まない恐怖に対して最も広く用いられている明確な言葉は不安であり、ここでは機能的な見地から取り上げている。

Wood ら(2007)は、小学校での教師とその他の介護者に関する児童の依存の理論的モデルをテストし支持している。愛着理論と社会認知理論に基づいて、親の出しゃばりと児童の分離不安が学校の介護者によって依存する行動を高めるものと仮定した。K-5 の等級の児童の家族が参加した。十分な精神測定特性による親と児童の報告尺度が用いられた。親の出しゃばりと児童の分離不安は密着した関係であり、クロス情報提供者相関分析における学校介護者との従属

関係であった。出しゃばりと分離不安は従属得点の変数で、18%～29%に対して結合して見積もられた。結果は親子関係の間の連続性と他の介護者の関係の愛着モデルと一致した。

Cooper と Tiknaz(2007)は、社会上、情緒上、行動上の困難を抱えている生徒が学校や家庭で効果的に学習することができる方法を展開している。学習の社会的、情緒的基礎を説明し、関わりを援助する実践的な戦略を表している。養育グループは、当初1970年代に考案され、実行されたが、主流となる学級の必要条件に適応する上での困難を抱えた生徒を満足させる特別に考案された学級である。学校で養育グループを運営する彼ら、彼らの親と教職員に参加している子どもたちの概観から養育グループの成功の証拠を提示し、どのような要因がグループの成功に影響を及ぼすかについて調べている。このことから、子どもの情緒的な必要性を認知し、必要性を満たす基本的な重要性を含む効果的实践とグループを調整している教師陣の関係の重要な役割に対する鍵となるメッセージを記述している。学校と家庭の養育グループは、学校での養育グループを運営する教育専門家と家庭で養育グループを運営している親と介護者に対する重要な情報と活用できるアドバイスを提供している。

Burijon(2007)によると、臨床不安は、重篤な苦悩が引き起こされている間、最適に機能することを妨げる不安のどのような形にでも言及される。強迫性障害、パニック障害、恐怖症と心的外傷後ストレス障害のような不安と不安に関連する障害は、心理療法において個人に報告される主として現れる問題の一つである。研究は、不安に対する重要で相当生物学的な基礎が示された。不安の症状は、生理的に現れるかも知れず、例えば、不安のある患者は、例えば息切れのような動悸または呼吸器症状の形で心血管系の症状を体験するかも知れない。生化学プロセスを研究することによって、臨床不安の原因と治療処置の特定のモデルが、明確に述べられることになる。不安の生物学的ベースを理解することによって、臨床医はより効果的に患者の不安の起源と現れを決定し、最も効果的な薬理的治療処置を決定することができる。不安や心的外傷性ストレスに対する身体反応やストレス障害に対する最も効果的な治療処置に対する広範な導入を提供している。最初に、明らかに、簡潔に、神経系の働きをチェックしている。次に、精神薬理学についての章では、不安に対するいくつかの精神薬理学治療処置の主要な特徴、利得と不利を詳細に描写している。個々の章は、全般性不安障害、強迫性障害、パニック障害、恐怖症、心的外傷後ストレス障害のような不安障害の主要なカテゴリーに当てられる。これらの不安障害の各々の独特の徴候が説明され、治療処置オプションが概説される。様々な医学的治療的介入と同様に、不安障害の疫学的調査を提供している。臨床理論と治療処置のプロトコールが、急速に発展している。概念上で経験的なデータをまとめる包括的なテキストと特殊な臨床治療による関連理論を必要とする学生だけではなく医学専門家が、臨床不安の生物学的ベースから利益を得ることになる。

Satoら(2007)によると、慢性的な痛みのある児童青年の長期欠席の高い割合については文献で十分に裏付けられてきているが、これらの若者の間での長期欠席は、十分には理解されていない。痛みのないふつうの人々の中での学校回避あるいは登校拒否に関して焦点を当てている

文献では、小児の慢性的痛みの人々の中での問題のある長期欠席のより良い理解に寄与する潜在的な能力がある。ここでは、小児の慢性的な痛みによる長期欠席について知られていることに焦点を当てた文献の概観と一般的な人々の問題のある長期欠席についての文献がこれらの現象の理解を知らせることができる方法を提示している。

Kauffman と Konold(2007)によると、現実についての1つの間違っただけの仮定は、教育方針の失敗を確実にするのに十分である。落ちこぼれを作らないための初等中等教育法(No Child Left Behind Act)のような政策での現実を、いろいろな理由のために、あまりに多くの人々が、無視してきた。一般的であれ特別であれ、教育の改革や改善について真剣な人は、少なくとも、測定、統計分布、測定の間違い、ラベル、特別なサービス、教師の責任、教師の訓練のような領域で、現実と直面しなければならない。深刻な課題があることが分かっている教育政策を法律としたり支持したりすることは受け入れがたいものであり、既知の安全上の欠陥や有害な影響のある商品を市場に出す、あるいは、ビジネスの処理における重大な現実を無視する犯罪的な行為に等しい。

Creswell ら(2007)によると、児童の不安は一般的で深刻な状態である。最近の試みでは、治療処置過程において、親により多くの注意を向ける傾向があり、過去の10年間では、治療処置に焦点を当てた研究の増加が見られている。この概観では、家族を基盤とした認知行動療法の有効性を調査し、その有効性に影響を及ぼすかも知れない要因のいくつかを詳細に描写しようとするものである。結果測定の選択とタイミング、子どもの年齢と性別、親の不安の水準、子どもの不安の重篤さとタイプ、治療処置の様式と内容が詳細に調べられた。主要な結論は必然的に暫定的であるが、家族認知行動療法(FCBT)がどのような治療処置より優れず、いくつかの結果測定に対して、児童認知行動療法(CCBT)より優れていることはありうることである。家族認知行動療法(FCBT)がうまくいっているところで、結果は追跡調査において一貫して維持されている。親が不安であり、このことが申し出られない所では、結果がよりよくないように思われる。しかし、不安を抱えている親の子どもたちにとって、家族認知行動療法の方が、児童認知行動療法よりもおそらく効果的である。最も明白であることは、広く、うまく設計された研究が、これらの要因を単独で、組合せをして調べることが、現在必要であるということである。

### III おわりに

2007年のPSYCHOLOGICAL ABSTRACTSにおける不登校に関連すると考えられる研究では、単行本の形で出版され、その中での章が文献として取り上げられているものが多く見られてきている。また、特別支援教育で取り上げられている障害に関わる文献が増加してきている。不安障害、社会恐怖、行為障害、自閉症スペクトラムなどに関する文献が多く見られているが、これらの重複障害についても取り上げられていることも近年の特徴であ

る。薬物やタバコの常用等の物質乱用と不登校の関連を取り上げている文献も見られるが、ここでは幾つかしか取り上げなかった。

インターネットでの掲載が容易になり、引用文献、参考文献をあわせて掲載する文献が多くなっている。文献を電子データとして保存をすることが普通となったこともあり、それぞれのキーワードに関わる文献数が著しく増加してきていることも近年の特徴である。

2007年のDIALOGデータベースでのPSYCHOLOGICAL ABSTRACTSでは、2008年6月現在で、school attendanceに関する文献が462件、school dropoutsに関する文献が273件、school phobiaに関する文献が329件、school refusalに関する文献は161件であった。2007年の検索文献総数は1,225件であり、このうち85件について取り上げた。検索文献件数は、1997年101件、1998年95件、1999年118件、2000年166件、2001年289件、2002年280件、2003年371件、2004年833件、2005年935件、2006年806件であり、文献数としては初めて1,000件を超した。2004年以降の急激な増加が文献の電子化の普及と関連があると考えられる。直接的な関連がない文献は誌面の関係で取り上げていないが、各キーワード毎の経年変化については、そろそろまとめなければならないと考えている。増減については今後も注目しておきたい。

基礎研究としてのERICおよびPSYCHOLOGICAL ABSTRACTSの文献を用いた世界の不登校に関する研究の1年毎の概観は、17年目となる。2002年まで進めてきたERICの年毎の概観が、検索形態が変更されたためできなくなったことは残念であるが、PSYCHOLOGICAL ABSTRACTSの年毎の検索が可能であるので、基礎研究を継続する。日本における登校に関連する問題、不登校に関連する問題は解決してきているとは考えられず、今後も2000年代の1年毎の概観のアプローチをしていく必要があると考える。

## 文献

- Balfanz, Robert et al. : Preventing student disengagement and keeping students on the graduation path in urban middle-grades schools: Early identification and effective interventions., Educational Psychologist, 42 (4), 223-235, 2007.
- Barbarese, William J. et al. : Modifiers of long-term school outcomes for children with attention deficit/hyperactivity disorder: Does treatment with stimulant medication make a difference? Results from a population-based study., Journal of Developmental & Behavioral Pediatrics, 28 (4), 274-287, Aug, 2007.
- Beidel, Deborah C.; Stipelman, Brooke : Anxiety disorders., Hersen, Michel et al. (Ed), Adult psychopathology and diagnosis (5th ed.), 349-409, 2007.
- Bernstein, Robert F. et al. : The complex pathway from attachment to personality disorder: A life span perspective on interpersonal dependency., Freeman, Arthur et al. (Ed), Personality

- disorders in childhood and adolescence.,559-609,2007.
- Blote, Anke et al. : Socially anxious adolescents' perception of treatment by classmates.,*Behaviour Research and Therapy* , 45 (2) , 189-198 , Feb , 2007.
- Bolte, Sven et al. : A case-control study of personality style and psychopathology in parents of subjects with autism.,*Journal of Autism and Developmental Disorders* ,37 (2) ,243-250, Feb , 2007.
- Bosacki, Sandra et al. : Peer relationships and internalizing problems in adolescents: Mediating role of self-esteem., *Emotional & Behavioural Difficulties* ,12 (4) , 261-282, Dec,2007  
*Maladjustment & Therapeutic Education, Therapeutic Care & Education.*
- Burijon, Barry N. : Biological bases of clinical anxiety.,xi , 352 , 2007.
- Caldwell, Christopher Les et al. : Effectiveness of a multiple family group intervention for juvenile first offenders in reducing parent stress.,*Journal of Child and Family Studies* , 16 (3) , 443-459 , Jun , 2007
- Carpentier, Francesca R. Dillman et al. : Engaging Mexican origin families in a school-based preventive intervention.,*Journal of Primary Prevention* , 28 (6) , 521-546 , Nov , 2007
- Chafouleas, Sandra et al. : School-based behavioral assessment: Informing intervention and instruction., *Series: The Guilford practical intervention in the schools series.*,xi , 148 , 2007.
- Chalfant, Anne Marie et al. : Treating anxiety disorders in children with high functioning autism spectrum disorders: A controlled trial., *Journal of Autism and Developmental Disorders* , 37 (10) , 1842-1857, Nov, 2007.
- Chen, Greg : School disorder and student achievement: A study of New York City elementary schools., *Journal of School Violence* , 6 (1) , 27-43, 2007.
- Chorpita, Bruce F. : Modular cognitive-behavioral therapy for childhood anxiety disorders *Series: Guides to individualized evidence-based treatment.*,xiv , 335 , 2007.
- Christle, Christine A. et al. : School characteristics related to high school dropout rates.,*Remedial and Special Education*,28 (6) , 325-339, Nov-Dec , 2007 *RASE: Remedial & Special Education.*
- Connolly, Sucheta D.; Bernstein, Gail A. : Practice Parameter for the Assessment and Treatment of Children and Adolescents With Anxiety Disorders.,*Journal of the American Academy of Child & Adolescent Psychiatry* , 46 (2) , 267-283 , Feb , 2007.
- Cooper, Paul; Tiknaz, Yonca : Nurture groups in school and at home: Connecting with children with social, emotional and behavioural difficulties.,*Series: Innovative learning for all.*,159, 2007.
- Creswell, Cathy et al. : Family treatment of child anxiety: Outcomes, limitations and future directions.,*Clinical Child and Family Psychology Review* ,10 (3) , 232-252 , Sep , 2007.
- Davis-Gage, Darcie et al. : "When home is not a haven": Addressing domestic violence.,*Book: Dugger, Suzanne M. (Hobson) et al. (Ed), Critical incidents in counseling children.*,213-222, xxii,

- 410 , 2007.
- DeRosier, Melissa E. ; Gilliom, Miles : Effectiveness of a parent training program for improving children's social behavior, *Journal of Child and Family Studies* , 16 (5) , 660-670 , Oct , 2007.
- Dorr, Ashley R. : Collaboration and creativity: Art therapy groups in a school suspension program, Camilleri, Vanessa A. (Ed) ,*Healing the inner city child: Creative arts therapies with at-risk youth.*,164-179, 2007.
- Edgar, J. Christopher et al. : Psychophysiology in research on psychopathology.,Book: Cacioppo, John T.et al. (Ed) ,*Handbook of psychophysiology (3rd ed.)* ,665-687, 2007.
- Erath, Stephen A. et al. : Social anxiety and peer relations in early adolescence: Behavioral and cognitive factors., *Journal of Abnormal Child Psychology* , 35 (3) , 405-416 , Jun , 2007.
- Farrell, Lara et al. : School-based interventions for anxiety disorders in children and youth., Evans, Steven W. et al. (Ed) ,*Advances in school-based mental health interventions: Best practices and program models, Vol II.*,1-20, 2007.
- Franklin, Martin E.; Foa, Edna B. : Cognitive behavioral treatment of obsessive-compulsive disorder.,Nathan, Peter E. et al. (Ed) ,*A guide to treatments that work (3rd ed.)* ,431-446, 2007.
- Feldman, Jonathan M.et al. : Differential effects of stress management therapies on emotional and behavioral disorders., Lehrer, Paul M.et al. (Ed) ,*Principles and practice of stress management (3rd ed.)* ,638-681, 2007.
- Friman, Patrick C. : The fear factor: A functional perspective on anxiety.,Series: Practical resources for the mental health professional., Sturmey, Peter (Ed) ,*Functional analysis in clinical treatment.*, 335-355, 2007.
- Frostad, Per; Pijl, Sip Jan : Does being friendly help in making friends? The relation between the social position and social skills of pupils with special needs in mainstream education.,*European Journal of Special Needs Education* ,22 (1) , 15-30, Feb, 2007.
- Geier, Andrew B.et al. : The relationship between relative weight and school attendance among elementary schoolchildren., *Obesity* , 15 (8) , 2157-2161 , Aug , 2007 *Obesity Research*.
- Ginsburg, Golda S. ; Kingery, Julie Newman : Evidence-based practice for childhood anxiety disorders., *Journal of Contemporary Psychotherapy* , 37 (3) , 123-132 , Sep , 2007.
- Goldston, David B. et al. : Reading Problems, Psychiatric Disorders, and Functional Impairment from Mid- to Late Adolescence.,*Journal of the American Academy of Child & Adolescent Psychiatry* , 46 (1) , 25-32 , Jan , 2007.
- Gordon, Jocelyne et al. : Treatment of children's nighttime fears: The need for a modern randomised controlled trial.,*Clinical Psychology Review* , 27 (1) , 98-113 , Jan , 2007.
- Grant, Bridget F.; Weissman, Myrna M. : Gender and the prevalence of psychiatric disorders., Narrow, William E.et al. (Ed) ,*Age and gender considerations in psychiatric diagnosis: A*

- research agenda for DSM-V.,31-45, 2007.
- Harrison, Joyce N.et al. : Medical management of Tourette syndrome and co-occurring conditions  
Woods, Douglas W.et al. (Ed) ,Treating Tourette syndrome and tic disorders: A guide for  
practitioners.,113-153 , 2007.
- Howlin, Patricia : The outcome in adult life for people with ASD., Series: Cambridge child and  
adolescent psychiatry., Book: Volkmar, Fred R. (Ed) ,Autism and pervasive developmental  
disorders (2nd ed.) ,269-306, 2007.
- Jenner, Eric ; Jenner, Lynne W. : Results from a first-year evaluation of academic impacts of an  
after-school program for at-risk students.,Journal of Education for Students Placed at Risk ,  
12 (2) ,213-237 , 2007.
- Joomann, Jutta et al. : Biased Processing of Emotional Information in Girls at Risk for  
Depression., Journal of Abnormal Psychology ,116 (1) , 135-143 , Feb , 2007.
- Kahn, Gloria Batkin ; Aronson, Seth : Group treatment for traumatized adolescents: Special  
considerations., Group , 31 (4) , 281-293 , Dec , 2007.
- Kauffman, James M.; Konold, Timothy R. : Making sense in education: Pretense (including No  
Child Left Behind) and realities in rhetoric and policy about schools and schooling.,  
Exceptionality , 15 (2) , 75-96 , 2007.
- Kearney, Christopher A.; Bensaheb, Arva : Assessing Anxiety Disorders in Children and  
Adolescents.,Smith, Steven R.et al. (Ed) ,The clinical assessment of children and adolescents: A  
practitioner's handbook.,467-483 , xv , 628 , 2007.
- Kearney, Christopher A. : Forms and functions of school refusal behavior in youth: an empirical  
analysis of absenteeism severity., Journal of Child Psychology and Psychiatry ,48 (1) , 53-61,  
Jan , 2007.
- Kearney, Christopher A.; Albano, Anne Marie : When children refuse school: A  
cognitive-behavioral therapy approach, Therapist guide (2nd Ed.) ,vi , 272 , 2007
- Kiuru, Noona et al : The role of peer groups in adolescents' educational expectations and  
adjustment., Journal of Youth and Adolescence , 36 (8) , 995-1009 , Nov , 2007.
- Knitzer, Jane; Cohen, Elena P. et al. : Promoting resilience in young children and families at the  
highest risk: The challenge for early childhood mental health., Book: Perry, Deborah F.et al.  
(Ed) ,Social and emotional health in early childhood: Building bridges between services and  
systems., 335-359 , xxiii , 404 , 2007.
- Koball, Heather : Living arrangements and school dropout among minor mothers following  
welfare reform., Social Science Quarterly , 88 (5) , 1374-1391 , Dec , 2007 Southwestern Social  
Science Quarterly.
- Leach, Monica T. et al. : The impact of the academic achievement gap on the African American

- family: A social inequality perspective., *Journal of Human Behavior in the Social Environment* , 15 (2-3), 39-59, 2007.
- Lee, Jennifer C.; Staff, Jeremy : When work matters: The varying impact of work intensity on high school dropout., *Sociology of Education* , 80 (2) , 158-178 , Apr , 2007 *Journal of Educational Sociology*.
- Lee, Trish ; Breen, Lauren : Young people's perceptions and experiences of leaving high school early: An exploration.,*Journal of Community & Applied Social Psychology* , 17 (5) , 329-346, Sep-Oct , 2007.
- Marachi, Roxana et al. : Effects of student participation and teacher support on victimization in Israeli schools: An examination of gender, culture, and school type.,*Journal of Youth and Adolescence* , 36 (2) , 225-240 , Feb , 2007
- Marks, Gary N. : Do schools matter for early school leaving? Individual and school influences in Australia., *School Effectiveness and School Improvement* , 18 (4) , 429-450 , Dec , 2007.
- Mash, Eric J.; Hunsley, John : Assessment of child and family disturbance: A developmental-systems approach., Mash, Eric J. et al. (Ed) ,*Assessment of childhood disorders* (4th Ed.) , 3-50, 2007.
- McLaughlin, Katie A. et al. : Racial/ethnic differences in internalizing and externalizing symptoms in adolescents.,*Journal of Abnormal Child Psychology* ,35 (5) , 801-816 , Oct , 2007.
- Meiser-Stedman, Richard et al. : Parent and child agreement for acute stress disorder, post-traumatic stress disorder and other psychopathology in a prospective study of children and adolescents exposed to single-event trauma., *Journal of Abnormal Child Psychology* , 35 (2) , 191-201 , Apr , 2007.
- Michail, Maria; Birchwood, Max : Social phobia and depression in psychosis.,*Tidsskrift for Norsk Psykologforening* , 44 (5) , 537-547, May, 2007.
- Mixon, Natalie : Exploring critical theory and critical ethnography in the context of the production and reproduction of social class., Kincheloe, Joe L.et al. (Ed) ,71-93, 2007.
- Moffitt, Terrie E.et al. : Generalized anxiety disorder and depression: Childhood risk factors in a birth cohort followed to age 32.,*Psychological Medicine* ,37 (3) , 441-452 , Mar , 2007.
- Monroe, Scott M,et al. : Major Life Events and Major Chronic Difficulties Are Differentially Associated With History of Major Depressive Episodes.,*Journal of Abnormal Psychology* , 116 (1) , 116-124, Feb , 2007.
- Munoz, Marco A. et al. : Comprehensive school reform in middle schools: The effects of different ways of knowing on student achievement in a large urban district., *Journal of Education for Students Placed at Risk* , 12 (2) , 167-183, 2007.
- Reddy, Linda A.; De Thomas, Courtney : Assessment of Attention-Deficit/Hyperactivity Disorder

- with Children., Smith, Steven R. et al. (Ed), The clinical assessment of children and adolescents: A practitioner's handbook., 365-387, xv, 628, 2007.
- Robin, Joanna A. et al. : Avoidant personality disorder., Freeman, Arthur et al. (Ed), Personality disorders in childhood and adolescence., 611-637, 2007.
- Sato, Amy F. et al. : School absenteeism in pediatric chronic pain: Identifying lessons learned from the general school absenteeism literature., Children's Health Care, 36 (4), 355-372, 2007.
- 佐藤正道 1992a 『世界の不登校研究の展望－1980年以降のERICおよびPSYCHOLOGICAL ABSTRACTSの文献を中心に』, 鳴門教育大学修士論文, p.295
- 佐藤正道 1992b 『1991年の世界の不登校研究の概観－ERICおよびPSYCHOLOGICAL ABSTRACTSの文献から－』, 鳴門生徒指導研究 第2号, 91-110
- 佐藤正道 1993 『1992年の世界の不登校研究の概観－ERICおよびPSYCHOLOGICAL ABSTRACTSの文献から－』, 鳴門生徒指導研究 第3号, 179-197
- 佐藤正道 1994 『1993年の世界の不登校研究の概観－ERICおよびPSYCHOLOGICAL ABSTRACTSの文献から－』, 鳴門生徒指導研究 第4号, 174-187
- 佐藤正道 1995 『1994年の世界の不登校研究の概観－ERICおよびPSYCHOLOGICAL ABSTRACTSの文献から－』, 鳴門生徒指導研究 第5号, 156-167
- 佐藤正道 1996 『1995年の世界の不登校研究の概観－ERICおよびPSYCHOLOGICAL ABSTRACTSの文献から－』, 鳴門生徒指導研究 第6号, 154-168
- 佐藤正道 1997 『1996年の世界の不登校研究の概観－ERICおよびPSYCHOLOGICAL ABSTRACTSの文献から－』, 鳴門生徒指導研究 第7号, 89-104
- 佐藤正道 1998 『1997年の世界の不登校研究の概観－ERICおよびPSYCHOLOGICAL ABSTRACTSの文献から－』, 鳴門生徒指導研究 第8号, 181-203
- 佐藤正道 1999 『1998年の世界の不登校研究の概観－ERICおよびPSYCHOLOGICAL ABSTRACTSの文献から－』, 鳴門生徒指導研究 第9号, 100-121
- 佐藤正道 2000 『1999年の世界の不登校研究の概観－ERICおよびPSYCHOLOGICAL ABSTRACTSの文献から－』, 鳴門生徒指導研究 第10号, 86-109
- 佐藤正道 2001 『2000年の世界の不登校研究の概観－ERICおよびPSYCHOLOGICAL ABSTRACTSの文献から－』, 鳴門生徒指導研究 第11号, 94-122
- 佐藤正道 2002 『2001年の世界の不登校研究の概観－ERICおよびPSYCHOLOGICAL ABSTRACTSの文献から－』, 鳴門生徒指導研究 第12号, 60-85
- 佐藤正道 2003 『2002年の世界の不登校研究の概観－ERICおよびPSYCHOLOGICAL ABSTRACTSの文献から－』, 鳴門生徒指導研究 第13号, 142-170
- 佐藤正道 2004 『2003年の世界の不登校研究の概観－PSYCHOLOGICAL ABSTRACTSの文献から－』, 鳴門生徒指導研究 第14号, 74-109
- 佐藤正道 2005 『2004年の世界の不登校研究の概観－PSYCHOLOGICAL ABSTRACTSの文

- 献から一』,鳴門生徒指導研究 第15号,53-101
- 佐藤正道 2006 『2005年の世界の不登校研究の概観－ PSYCHOLOGICAL ABSTRACTS の文献から一』,鳴門生徒指導研究 第16号,40-81.
- 佐藤正道 2007 『2006年の世界の不登校研究の概観－ PSYCHOLOGICAL ABSTRACTS の文献から一』,鳴門生徒指導研究 第17号,53-96.
- Schonberg, Michael A.; Shaw, Daniel S. : Do the predictors of child conduct problems vary by high- and low-levels of socioeconomic and neighborhood risk?,*Clinical Child and Family Psychology Review* , 10(2), 101-136 , Jun , 2007.
- Schonberg, Michael A.; Shaw, Daniel S. : Risk factors for boy's conduct problems in poor and lower-middle-class neighborhoods., *Journal of Abnormal Child Psychology* , 35(5), 759-772 , Oct , 2007.
- Sheldon, Steven B. : Improving student attendance with school, family and community partnerships., *Journal of Educational Research* , 100(5), 267-275, May-Jun, 2007.
- Sheppard, Anne : An approach to understanding school attendance difficulties: Pupils' perceptions of parental behaviour in response to their requests to be absent from school.,*Emotional & Behavioural Difficulties* , 12(4), 349-363, Dec , 2007.
- Sinha, Jill Witmer : Youth at Risk for Truancy Detour Into a Faith-Based Education Program: Their Perceptions of the Program and its Impact.,*Research on Social Work Practice* , 17(2), 246-257 , Mar , 2007.
- Southam-Gerow, Michael A.; Chorpita, Bruce F. : Anxiety in children and adolescents., Mash, Eric J. et al (Ed) ,*Assessment of childhood disorders (4th Ed.)* . 347-397,2007.
- Stearns, Elizabeth et al. : Staying back and dropping out: The relationship between grade retention and school dropout.,*Sociology of Education* , 80(3), 210-240 , Jul,2007 *Journal of Educational Sociology*.
- Strom, Renee E.; Boster, Franklin J. : Dropping out of high school: A meta-analysis assessing the effect of messages in the home and in school., *Communication Education* , 56(4), 433-452 , Oct , 2007.
- Suh, Suhyun; Suh, Jingyo : Risk factors and levels of risk for high school dropouts.,*Professional School Counseling* , 10(3), 297-306 , Feb , 2007.
- Torres, Vasti : Knowing today's and tomorrow's students.,*Book:Kramer, Gary L.*,3-16 , 2007.
- Townsend, Loraine et al. : A systematic review of the relationship between high school dropout and substance use.,*Clinical Child and Family Psychology Review* ,10(4),295-372, Dec, 2007.
- Unger, Jennifer B. et al. : A comparison of acculturation measures among Hispanic/Latino adolescents.,*Journal of Youth and Adolescence* , 36(4), 555-565, May , 2007.
- Vecchio, Jennifer; Kearney, Christopher A. : Assessment and Treatment of a Hispanic Youth

With Selective Mutism.,*Clinical Case Studies* , 6 (1), 34-43 , Feb , 2007.

Vieno, Alessio et al. : Civic participation and the development of adolescent behavior problems.,  
*Journal of Community Psychology* , 35 (6), 761-777 , Aug , 2007.

Weissman, Myrna M. et al. : Clinician's quick guide to interpersonal psychotherapy.,xiv,183,  
2007.

Williams White, Susan et al. : Social skills development in children with autism spectrum  
disorders: A review of the intervention research., *Journal of Autism and Developmental  
Disorders* , 37 (10), 1858-1868 , Nov , 2007.

Wood, Jeffrey J. et al. : Dependency on elementary school caregivers: The role of parental  
intrusiveness and children's separation anxiety.,*Psychology in the Schools* , 44 (8), 823-837,  
Nov, 2007.